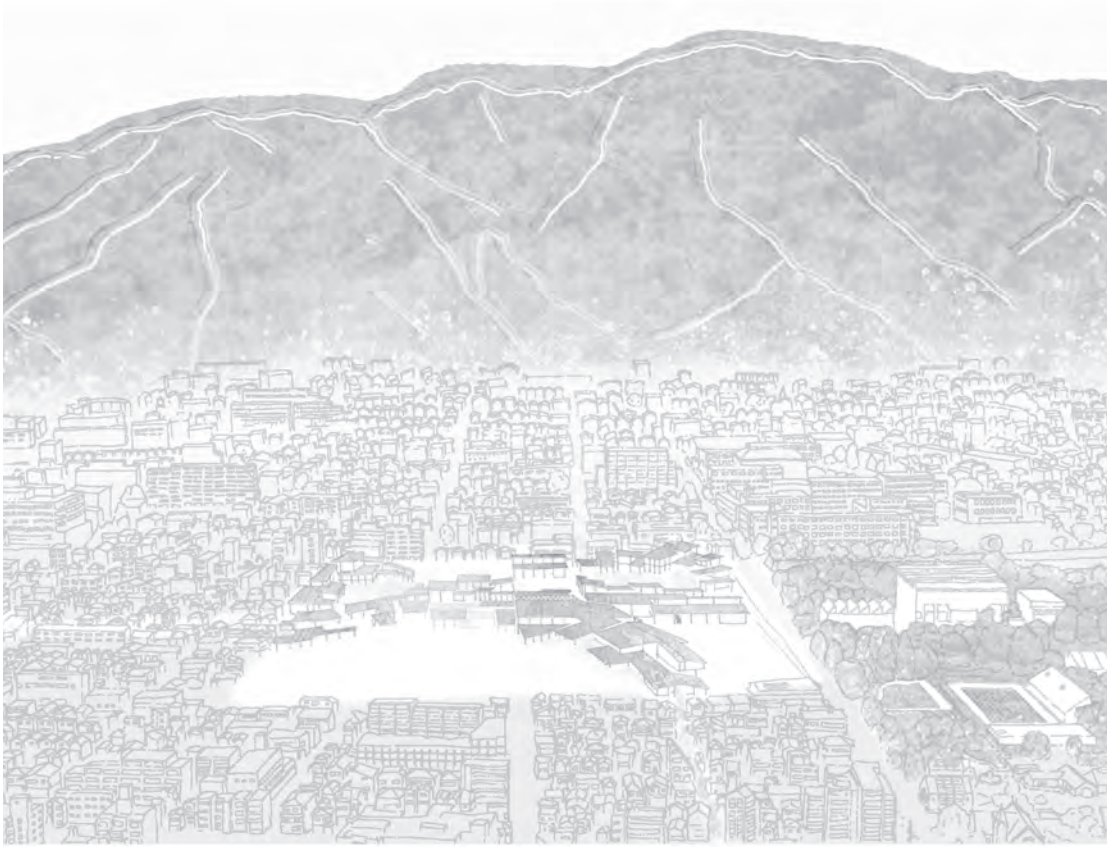
大きな学校

公立の小学校、中学校、高校の建て替えのプロジェクトである。

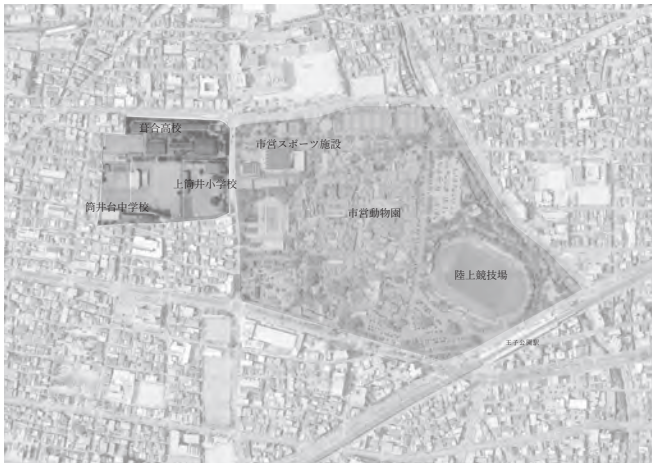
学校での学びとは、授業で先生に教えてもらうということだけではない。何かを発見したり、誰かに出会ったり、ぼーっと一人で考えたりするという学びがある。そしてそうした学びというのは学校という建築にとってとても重要で、子供たちにとって尊い。

街の一部のような学校。子供たちの王国のような学校。みんなが頼りにするお屋敷のような学校。そんな学校があったら素晴らしいと思った。

「大きい」ということが、ただ大きいのではなくて、街にとって大きい、みんなにとって大きい。そんな学校を設計した。



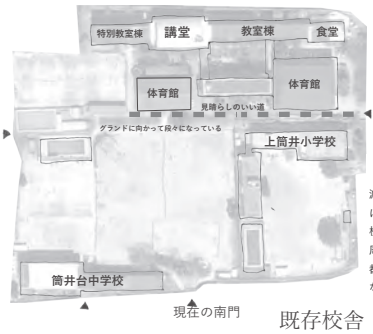
ただ大きいのではなくて、街にとって大きい学校



SITE: 兵庫県神戸灘区

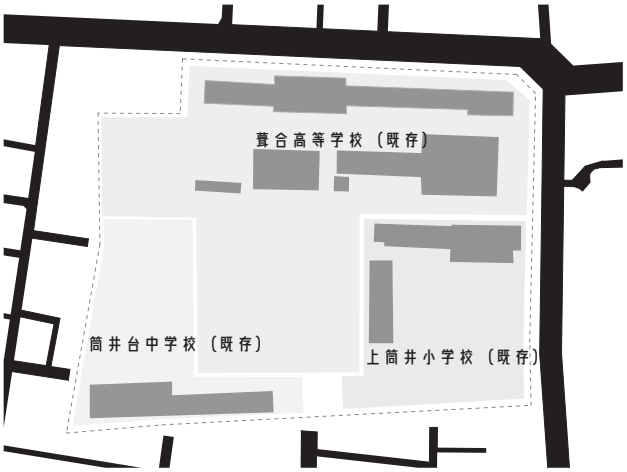
敷地は神戸の緩やかな傾斜地に位置する。

小、中、高３つの公立学校がギュッと集まって建っている。学校の東側には駅や神戸市の公共施設が集まっていて、西側には住宅街が広がっている。

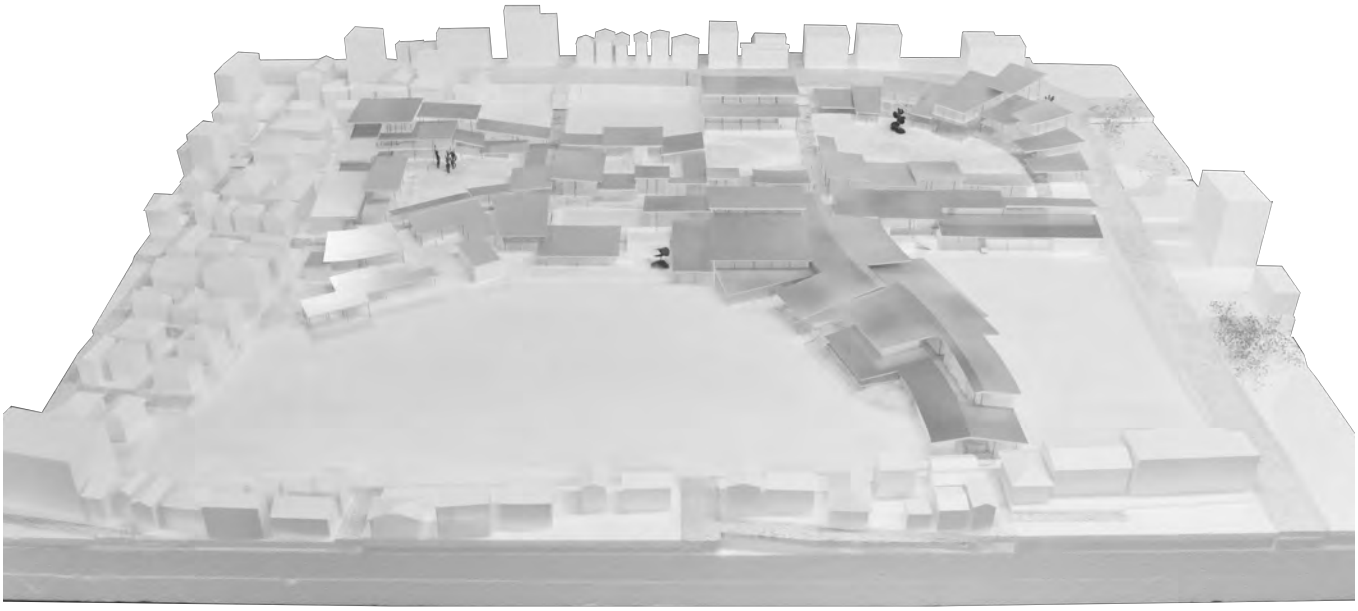


減築と増築を繰り返して今の姿に至る
校舎がバラバラになっていて、周りをぐるぐる歩き回れる
都市的な経験をともなう配置になっている

既存校舎



バラバラに配置された既存の学校 → 道によって街とつながる学校



敷地によって行き止まりとなっている道を資源ととらえ、東西、南北方向に誰でも通れるような大きな道を通す。その道沿いに図書館や食堂、音楽室といった特別機能を配置し、学生が使っていない時間帯には街の人が自由に利用できるようにする。つまり、商店街のような、子供も大人も歩く賑わいの連続した商店街のような道が平面配置の骨格となる。

また、だれでも通れる大きな道を迂回するように通した裏道を、小学生、中学生だけが通れるプライバシーが確保された道とし、その裏道に沿って小学校、中学校のクラスルームを配置していく。道を通していって結果、道によって囲まれたいくつかの広場ができる。

それぞれの広場、建築、道が関係しあい、単なる移動空間の廊下ではない、活動の交点としての道によって学校がつくられる。

スポーツコート
ブックスペース
先生の部屋
丘の頂上が居場所となる
丘のよて授業
部活やモーニングを使う
生物実験室
園芸教室
和室
温室
広場に対してご飯を食べる
茶器倉庫
食堂
調理室
共用倉庫
花壇
八百屋
音楽室
全員でコンサートができる
弁当屋
道に出ていく
調理棟
先生の部屋
ブックスペース
現場で本を読む
大ホール
楽器空
男更衣室
女更衣室
石に登っていく
レストラン
じゃぶじゃぶ池
外に出て行って食べる
調理室
アトリエ
裁縫室

体育館
疲れたら土間で休憩する
先生の部屋
広場に開けられた教室
大きな屋根の下のたまり場
奥に入っていく
路地を抜けた先のウラニワ
ブックスペース
先生の部屋
屋根下の屋外工作スペース
工房
倉庫
木材加工室
図工室
デジファブ室
理科室
被服室
大実験室
生徒会室
カフェ
先生の部屋
体育館
教科準備室
ーニングルーム
大浴場
クリーニング室
診療所
薬局
食堂
自転車置き場
卓球場
運動倉庫
チャル
可広場延出ていく
理製店
保健室
PCルーム
食堂
ちょっ一時に使われる
リソースセンター
市役所の出張所
先生の部屋

平面図 1/1000

卒制で考えていたことについて

卒業設計の最終講評から2週間が経ち、一度卒制で考えたことを言葉にして残すということをしてみたくて、文章を書くことにした。

敷地に建っている高校は僕の母校で、僕が高校生のときにバラバラに立っていた古い校舎群が建て替えられ、今はまるでマンションのような、壁のような新校舎が建っていて、あらゆる教室が集約されている。古くて汚いけれど、様々な居場所があって好きだった学校が建て替えられてしまったことに自分は強い反発があって、「新しくてきれいな」新校舎が嫌いだったから、全部自分で設計しなおしてやろうというのが、プロジェクトの最初の動機である。

どの町にもある学校という建築は、みんな似たような姿をしていて、平面を見ると牢屋と通路でできた刑務所みたいで、最悪の建築にも思える。もっと言うと、学校はそこで行われる教育も含めて労働者の生産工場のようで、教育というのは洗脳と大差ないような感じがしてくる。そのような見方で改めて学校を見ると、とんでもないところで12年間過ごしたなあ、と思う。でも、そうした学校で自分が過ごしてきた日々も素晴らしいものだったとも思うから、ちょっと変な感じである。

一方で、学校という建築がとても救われているなと思うのは、どの学校にもグラウンドがあるということである。それは不幸中の幸いで、つまり逃げ場がある。教室という空間に耐えられない子供は、ずっと窓の外を眺めながら12年間やり過ごすだろう。自分の高校生活を思い返せば、昼ご飯はどれだけ暑くても外で食べていた。教室の中で昼ご飯を食べた記憶はほとんどない。汗をかきながら、まぶしくて目を細めながら運動場の隅っこで昼ご飯を食べていたのは、学校という牢屋から出たかったのだと思う。そう考えてみると、もしかしたら高校時代の「学校から出たい」という私的な欲望がこの卒業設計を生んだのかもしれない。

設計をするなかで、「学校なんて本当に必要なんだろうか」という問いが常に自分の中にあった。世の中の学校を見ると、学校は社会や国という仕組みを成立させるためにあるのであって、学ぶということを考えると学校というものはむしろ弊害そのもののように感じられてくることもあった。優れた先生の授業はネットで受けられるし、学校がやたら規律や規則を重んじるのは、大人がそうあってほしいと考えているからであって、子供のためではない。義務教育で教えられるような内容はインターネットで調べれば出てくるのだから、学校の存在意義を「子供が勉強する」という機能にあるとすると、クラスルームも授業も先生もすでに役割を終えている気がしてくる。

それでも、学校の必要性やかけがえのなさについて考えていくと、それは「大きい」ということにあるように思えた。学校には「大きさ」がある。小さな学校もたくさんあるけれど、どんなに小さな学校でも自分の部屋で学ぶのと比べるとやっぱり全然大きさが違う。そして「大きさ」というのは単に寸法の話ではなく、たくさんの人がいるということや、いろいろな居場所があるという多様性も学校の持つ大きさだと思った。そして卒制でやりたかったのは、その「大きさ」が街や地域にひらかれていくということで、そうすれば今はただの敷地が大きい学校だけど、いずれはみんなにとって大きい、街にとって頼りにされるような学校になると思った。今、街には子供たちの居場所がどんどんなくなっている。子供が邪魔者みたいに見える。自分は個別指導の塾で先生をしていたけれど、今のこどもたちを取り巻く環境は本当にひどいように思えた。オフィスビルみたいな建物で、パーテーションに囲まれて勉強すること、街に出ると走り回れる場所がないこと、他人に迷惑をかけてはいけないこと、子供たちは大人が作り上げたそういった自己責任の社会を当たり前だと思って過ごしている。そして大人は子供に関心がない。大人は自分たちの手で社会を変えることができるが、子供たちは声を上げることができない。街で静かにひっそりと過ごす子供たちを見て、大人たちは彼らが実は泣いているのではないか思う想像力を持たないといけない。

だから僕は「子供の王国」みたいな学校をつくりたいと思った。王国というと独裁的な感じがするけれど、そういうことではなくて、学校の中にあるたくさんの建物や広場も含めて1つの特別な領域をつくるということである。そしてそれらはたくさんの中心をもちつつも街とつながっていく。そして、学校という建築が居場所をつくるというよりは、居場所が学校になっていくように設計したいと思った。道がそのまま子供たちの居場所になって、建築になって、そしてそれが学校、という感じで、もしそういうことができればそれは素晴らしい、本当の学校だなと思った。

みんなの卒制について

講評の順番が最後だったということもあって、ほとんどの人の発表が聞けなかったのは残念だったけれど、講評の数日後に勝手にガチャガチャとみんなの模型箱を開けたり、プレゼンテーションボードをあさったりして、ほとんどの人の設計を見た。この学年のみんなの良さは真面目さで、模型やプレゼンテーションボードからみんなの真面目さがひしひしと伝わってきた。僕が感じた「真面目さ」というのは、設計に対する真面目さというよりは設計をする自分自身に対する真面目さで、つまり答えを求めるということよりも、答えを求める自分自身をもとめるという真面目さなのだと思う。みんなが、卒制に追いつめられる中で「どうやったらうまくいくか」ではなく「何に対して熱中できるか」という問いを自分自身に立てていた。言い換えると「プロジェクトが等身大であるかどうか」ということかもしれない。伊波君は「バス停と住宅のあいだ」というスケールが自分にとって重要と考えたのだと思うし、同じように鈴木心君は「秘境」という身体的なスケールに焦点を定めていて、図面をたくさん書くことで私的な感覚から発生した問題を建築的なテーマとして深めようとスタディに打ち込んでいた。金子さんは「生態系」という抽象的なテーマを「国際寮」という身近な問題に落とし込み、そしてスケールや構造の問題に結びつけることで、抽象的なテーマを自分の等身大の問題として扱うことに成功していた。特に制作の最後の 1 週間はしんどかったけれど、そうしたみんなの真面目さに心を打たれ、勇気をもらった。

僕の卒制について

基本的にずっと楽しくできたと思う。1 週間考えても 2 週間考え続けてもうまく解けない問題も、3 週間考えることで乗り切るといったことが多かった。3 年生までの設計課題とちがって、一つの建築についてじっくりと考えることができたのは良かった。

去年石田奈穂さんを手伝って、その前の年は梅原徹さん、さらにその前は杉浦哲郎さんを手伝ったが、3 人からは設計はもちろんだけど人間性というか人柄というか、ヘルプとしてどういう人を手伝うのがやりがいがあるかということを学んだ。僕の卒制はヘルプのみんなに元気をもらってばかりではあったが、楽しい雰囲気で最後まで作業できたのは良かったと思う。強力な後輩のヘルプたちや、最後に力を貸してくれた 2 人の先輩、夜中何度もエスキスをした同期、何より 4 年間鋭い批評と叱咤激励をくださった建築家の方々と先生方に、本当に感謝しています。